

中津層のサルがいた時代

長谷川善和 (横浜国立大学名誉教授)

小泉君の発見

—ステゴドンゾウとサル化石—

私が神奈川県愛甲郡に分布する中津層について知ようになったのは、故因泰器氏が小型鯨類の頭蓋化石の一部

を発見して、同定のために持参された1980年頃のことです。しかし、この時はそれほど脊椎動物化石が話題になることもなかったので、現地を調査する機会がありませんでした。

小泉明裕君は、横浜国立大学大学院で何をテーマにして研究をするのか、はっきりしませんでした。当時、シカ類化石の標本で研究されていないものがかなりありましたので、彼にその仕



図1. サルの頭蓋骨化石。

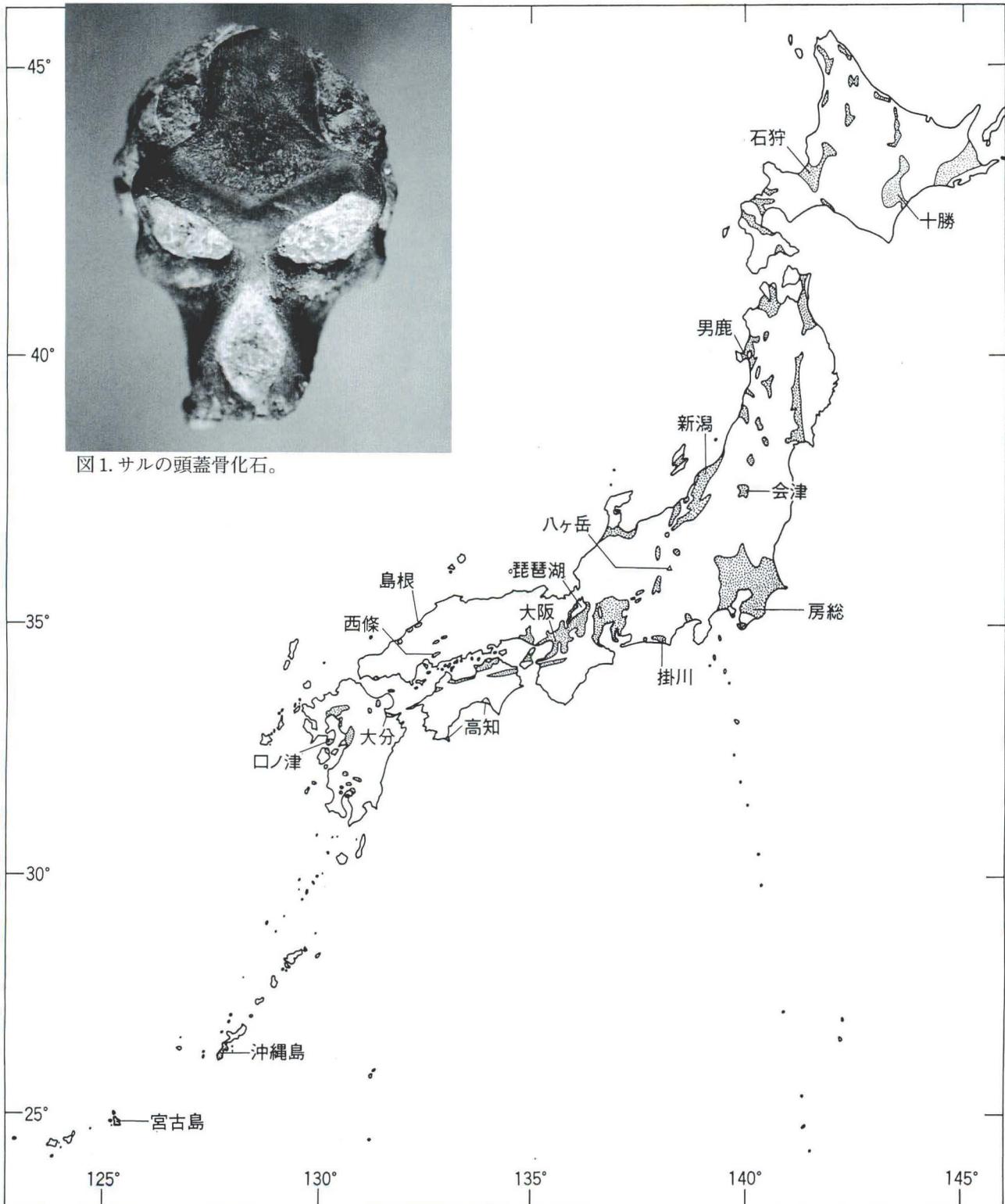


図2. 大阪層群とその相当層の日本における分布 (市原編1993, 大阪層群より)。

事を勧めましたが、何か気の進まない風で何ヶ月もぐずぐずしていました。今思えば、中津層の化石を若干入手しており、何か心を魅かれていたのでしよう。

1987年、ステゴドンゾウの頭蓋骨化石を発見してから、彼にはわかずに元気づきました。ちょうど、神奈川県立生命の星・地球博物館の開館を計画中のことであり、中津層のこうした化石が重要だとの判断で、神奈川県では直ちに発掘調査が立案されました。この発掘はかなりの成果を挙げました。小泉君が現地へ行けば、必ず骨の化石の一つ二つは手にしてくれるのには、いつも私たちは驚かされていました。1992年正月、私の家に卒業生が何人か集まりました。夜、帰り際に小泉君が内証でちょっと、と言って取り出したのが、まだ岩片の付着したサル頭蓋化石(図1)でした。一目でびっくりするような代物でした。

ここではサルのいた時代は、いったいどのような状況にあったのかを考察してみることにします。詳細はいずれ論文になる予定です。

中津層の時代区分

中津層は分布も狭く、孤立していますのであまり一般的ではありませんでした。その上第四紀の年代を示す地層がどんどん増えてしまい、今では第三紀鮮新世の地層は大変少ないのです。第三紀鮮新世から第四紀更新世にかけて堆積した地層の分布をみて見ると、図2のようです。鮮新世の地層はこの分布図の範囲に入るわけです。南関東地方で上総層群と呼ばれる地層や、近畿地方の大層群の一部がこれに相当します。

中津層が鮮新世になるというのは、年代測定にもよりますが、貝類化石を使って鮮新世の代表的な地層である静岡県掛川層群と比較できることにもよります。脊椎動物化石をもとに時代を推定すると、ホホジロザメ属が産出することから鮮新世以降であることが判る程度で、他には年代を決めることのできる化石が今のところ見つかりません。

中部地方から西へ下ると東海層群と

か古琵琶湖層群、大阪層群などの下部の地層が鮮新統中津層に相当します。第三紀鮮新世と第四紀更新世の境界をどのような基準で区別するのか、長い間議論がありました。

日本ではゾウの化石による化石帯の区分は、比較的良くやられています。とくに、大阪層群では火山灰層序とゾウ化石の産出の関係がよく判っています。それによると、*Stegodon aurorae*帯までが鮮新世に入ります。かつてはスギヤマゾウやアカシゾウと呼ばれたゾウの層準になっていました。南関東地方でもこれに対応するのは、東京都下の福生市、八王子市、日野市、川崎市、横浜市の小柴層、千葉県の梅ヶ瀬層などがあります。もっとも、中津層産出のステゴドン類(*Stegodon*)が、鮮新世であることを決める基準となるゾウ化石 *Stegodon aurorae* のかかどうか、決着がつくまでには、まだ時間がかかるでしょう。この化石に伴う化石群集は、現在までほとんど明らかにされていません。樽(1993)によれば、*Stegodon aurorae* より下位にある *S. shinsyuensis* 帯から鮮新世とする考えが提示されていますが、今後の研究課題です。さらに、陸生と海生の両動物相が混在することは、中津層の化石群集の極めて重要な特徴です。

ここでは中津層の古脊椎動物群を構成する要素は、今後、後期鮮新世の基準になるものであろうことを指摘するととどめておきます。

サル化石の渡来ルート

1995年5月16日に来日されたロシア古生物学研究所のイ・マシェンコさんが、貴重な講演をして下さいました。ロシアからアジアで見つかっている第三紀末から第四紀にかけての霊長類化石にはどんなものがあり、それらによって当時の霊長類相がどんなものと考えられるのか、熱心に話してくれました。

彼はロシア南部、コーカサス、中央アジアにかけて、19ヶ所から産出した39点の化石を調べました。それらはオナガザル科(*Cercopithecidae*) 5属、オランウータン科(*Pongidae*) 1属で、このうちの1つは、オレオピテクス科

(*Oreopithecidae*) に属する可能性もあるといえます。オナガザル科の一番古い化石は、アフリカのケニアの中新世前期のもので、ユーラシアでは、中新世後期から鮮新世前期頃、メソピテクス属(*Mesopithecus*)、ドリコプテクス属(*Dolichopithecus*)、パラプレスビティス属(*Parapresbytis*) などコロブス亜科(*Colobinae*) のものが主で、更新世中期のグルジア共和国のものが最後のようです。一方、鮮新世後半からは、マカク属(*Macaca*)、ヒヒ属(*Papio*) などのオナガザル亜科(*Cercopithecinae*) が、分布をひろげたと考えられています。

筆者らは、残念ながらまだこれらの化石を見ていませんが、中津層のサル化石がコロブス亜科に属するだろうということについて、マシェンコ氏も賛成しています。

インドや中国南部にまだこの種のものと思われる明瞭な化石が出ていないことから、中津層のサルの渡来ルートは、ヒマラヤの北、カザフスタン→モンゴル方面が一つの道と思われるのです。しかし、今日の環境からみると本当に移動が可能であったのか信じられないほど、サルにとっては厳しい環境と思われる。

もう一つ重要なことは、オナガザル科のサルは、ヒッパリオン動物群と共産するということです。未記載ではありますが、東北地方からヒッパリオンの化石も産出しており、中国チベットの高地から報告もあります。中津層のサルの渡来ルートを解明するためには古環境の復元、哺乳類の適応能力などの問題を解決しなければなりません。ここでは地球規模で乾燥化に向かうような環境のもとで、大雑把にサルが渡来したことだけを指摘しておきます。

さらに一言つけ加えるなら、私の夢の中には250万年前にアフリカ系と思われるこのサルと共に、別の霊長類も分布していた様子が現れるのです。